

青木淳弘： それではよろしくお願ひいたします。最初にお配りしたレジюме、二つありまして、ちょっと確認していただきたいんですが、一つは上に黒い線が入ってまして、レジюмеって書いてあるものでして、もう一つがタイトルが同じ、紛らわしいんですけども、上に黒い線が入っていないものがあります。本日はこっちの黒い線が入っているほうを資料として使いまして、もう一つは、きょうの内容を文章にしたものが。長いほうで、10 ページにわたっています。

きょうの報告、30 分、40 分ぐらいで行いたいと思うんですが、私、紹介が遅れましたが東京大学の人文社会系研究科の社会学研究室という所に所属しておりまして、社会学の分野で研究をしておりまして、都市工学であるとかあるいは都市計画ということに関して、実は勉強を始めたのがまだまだ日が浅くて、かなりその分野における専門的な知識に乏しいので、その点も踏まえた上で間違いであるとかコメント等ありましたら、寄せていただければと思っておりますのでよろしくお願ひいたします。

それできょうはこのレジюме見ていただいて、まず本日の報告の流れで導入、分析、展望というふうに書いてあるんですが、このように書いてあるのは、私、今どういう状況にあるかと言いますと、先ほど田口さんのほうからご紹介いただいたんですが、博士ではなくて実は修士の修士論文を書いているところでありまして、修士論文を書くにあたって、さまざまな都市っていう現象に関して少し興味があったんですね。

都市との関わりの中で都市社会学という分野があるんですが、その分野の中でどういったことが今まで見てきたのかとか、そういったことをまずお話ししながら、そこに田村明さんという人がどう関わってくるのかとか、そういったことを中心にお話ししたいと思っております。それでまず冒頭で、実は田村明さんを研究しますっていうふうなことを社会学研究室で話しましたところ「田村さんの研究ですか」というような声をいただきました。

それはどういう意味かっていうのを少し図りかねていたんですが、まず先ほど奥津さんの話に、歴史学における現代研究が非常に難しいというような、扱われてきていないということが話されていたんですが、現代研究の難しさというものが、まず存命の人だったら評価が定まりにくいということと、さまざまな見解があり得るっていうのが氾濫するので、なかなか1本の人物として固定することができないっていうことがあるのと、あともう一つ、例えば都市計画史であるとかそういうところではなく、なぜ社会学でやるのかっていうことをいろいろと言われまして、そこで1回、研究を行き詰まりというか、どうしたらいいのだろうかとか、いろいろと考えました。

その流れの中でやはり、ここのNPOに参加させていただいた一つのきっかけとして、去年の4月に大きな公開のシンポジウムが行われまして、そこで『今、田村明を読む』という鈴木先生のタイトルになっている本がありまして、そこから今、なぜ田村明を読むのかなっていうことを少し考えたわけです。レジюмеの導入の部分に書いてあるんですが、冒頭のタイトルの意味で『いま田村明を読むということ』というのを考えました。

今ということを考える上で過去というものは必要不可欠な視点だと思っています。それ

は過去の蓄積の上に今があるからで、今というものを照らし出すときに過去の経験から現状を踏まえ出す感じで、逆に今に何か問題があるからこそ、過去に対してその視点を向けて、そこから掘り出して今のあり方というのを考えると。そういうような視点から入っていくと、次に考えなければならないのは田村明という人の、参照されるべき功績としてどういうものがあるのかなっていうことを思っています。

これは、ここのNPOの目的の一つの田村明という人の功績を引き継ぐということで、どういった点に焦点を合わせるべきかって、しかもそれを社会学的にやるとしたらどういった方法であり得るのかなっていうことを考えたときに、都市計画の読者を生み出したことだと考えています。読者っていうのが非常に厄介なものだと思っているんですが、もちろんご存じのとおり田村明っていう人は、まちづくりに関する著作をたくさん残しているわけです。

それが非常に興味深くて、もちろん実用的な部分もあれば、かなり理論的な部分もあります。私が田村明さん、初めて触れたのは環境計画論っていう本でして、非常に興味深かったです。なぜ興味深かったかという、もちろん都市計画ってこういうふうな物事を考えるんだっていう方法論も面白かったんですが、何よりもそういったものが本として出版されて読者がいるっていうこと、そういうものを読む人がいたっていうこと、それは別に書いたものを批判しているわけではなくて、読者っていうものの存在があって、それが広まっていく。だからそれを通して地域の人が、都市計画であるまちづくりであるっていうことを考えるっていう現象自体がどういうことなのかっていうことを1回、考えていく必要があるのではないかなっていうふうに思ったわけです。

同時に、それと流れを同じようにして、官から民へっていうことで1980年の地区計画制度の制定であるとか、あるいはまちづくり3法なんていうものが1998年にできて、官から民へっていう形でまちづくりに参与するアクターが多様化して、さまざまな知見を生かして、それぞれの地域に対して都市を築いていく、地域をつくっていくという営みが行われるわけです。

そうなったときに、これもまた奥津さんの先ほどの報告を聞いていて、私も同じだと思うんですけども、例えば田村明っていう人を、まちづくりをわれわれが読むときに、それをやはりどう一般化するかっていうのは非常に重要な視点だと思っています。一般化、つまりその理論が普遍的なものとして受け入れられるためには、何を考えなければいけないかっていうと、それを受け入れる側がどういうふうにご利用するのかを考えなければならないというふうに思っています。そこで社会学的な観点ということで読むことを考えるというところにあるんですが。

読むという実践は相互行為だというふうにここに書いてあります。下にあるようにまず、著者っていう人。ここで言ったら田村明さんは経験や資料に基づいて、自らの思考を言葉にする。これを著述活動というふうに呼べると思うんですが、もちろん著述されたものを読者は、その言葉を自由な解釈へと展開するわけです。同時に著者は読者の解釈をさらに

解釈する、解釈の解釈を行うと。これを再帰的読解というふうに呼びました、これは僕が勝手に付けた名前ですが。

そういうように一種の相互関係だと思うんです、対話のような関係になると思うんです、読むという行為を。相互行為として、言ってみれば本に出るということは、読むということの自由さをいかようにも築けるわけですね。読むことが自由なだけけれども、自由であるからこそいくらでも物事は広がっていく可能性がある。だからある意味でどこが普遍的なものなのかと、どこが普遍的じゃなくて個別の地域によって受け入れられるべきところなのかっていうことを分けて考えない限り、田村明っていう人の理論を後世に引き継ぐときに、ただの著述に終わってしまうと思うんですね。

だからここでパスワードって書いてあるんですが、もっともらしいがあいまいな言葉って言われているもの、その意味を1回、確定しなければならなかったわけ。そこが、今、田村明を読むということの一つの非常に重要な点ではないかなというふうに考えています。下に、『問い、なぜいま田村明が読まれるのか？ それは誰が読むのか？』ということをやまずは第1の段階として考える必要があるのではないかなと思っています。

このハーバードガンズっていう人は、米国の都市社会学者として扱われることもあるんですが、都市計画にも携わったことがある人です。『都市計画のプランナーのもつ重要な役割とは、計画についてのラジカルな意見を投げかけること』です。『都市計画の帰結を住民と議論するときに、政治家のような役割を果たすこと、そして同時に住民にとっての都市計画の適切なアドバイザーであること』ということをや述べているわけですね。

この定義をそのまま当てはめるわけにはもちろんいかないと、日本の状況とアメリカの状況っていう、その状況を抜きにしたとしても、ラジカルな意見を投げかけるっていうことは一つ重要なわけ。つまり現状を変えていくのはラジカルな意見だと思うので。

ラジカルな意見を言うときに、仮に今、田村明が読まれるとしたら、どこかにラジカルな意見が流れていってしまう、あるいは政治家かつアドバイザーになれないような状況っていうのも踏まえた上で、どういった主体がそこに参与するのかっていうことを考えなければならぬというふうに思っている次第です。

レジュメ2ページ、『分析』というところにあるんですが、そこで社会学的に都市計画を読むなんていうふうなことを言っているんですけども、都市計画っていうのはやはり社会学の分野じゃなくて、工学的な技術じゃないかっていうようなことを言われるわけ。空間に対する見立てを組み立てていく、空間に対する配分とか資源をどうやって持つていくのかとか、そういうようなことを本来やっていることで、じゃあ社会学はそこにどういう貢献ができるのかっていうことを考える人はいないのかっていうことを少し考えまして。

そこでどんどん過去に掘っていったんですけども、社会学において都市計画の社会学っていうような形で、都市社会学っていうのはあるんですけども、都市計画はそこに、分析の対象に含まれていないって言うていいと思います。もちろんその中にいくつかは都市計画を変数として入れるような研究はあるんですけども、そういうものは今まであまりなか

ったと言っていると思うんです。ただ一つの糸口として奥井復太郎っていう人がいまして、日本の都市社会学のパイオニアにあたるような人なんですが、その人はこんなようなことを、ちょっと長い引用なんですけど読み上げます。

『都市計画の理想とは何か、いうまでもなくその対象は都市であり、内容は市民生活である。したがって都市計画は、市民生活にたいして美、利、健の三者を十分に満足せしむることを目的としている。これを都市計画における三位一体と呼びうるであろう。美とは、すなわち美をとうとび、これを守りかつ作り出すことである。利とはすなわち利便であり、主として経済をさす。健とは健康であって、市民生活上の保健にほかならぬ。この三者の均衡ある具体化は、都市計画の理想であること、多言を要せぬ。ところが現実においてこの三者が、そうやすやすと均衡一致せしめらるべきものでない。往々にして各個は排他的である。ことに、美または健は、利と反することが多い』というようなことを言っていたんですね。

これは問題の提起ですが、いろいろな事例が考えられると思うんですけども、スクラップ・アンド・ビルドなんていう言葉があるように、やはり例えば、経済的に非効率が増えたものが新しい建物に取って替わるとかいうことは、たとえその古い建物に歴史的な価値があるっていうふうに誰かが申し立てたとしても、それがここでいう美にあたるとしても、それが利にはかなわないので、それが更新されていくような、新しく建て替える、経済的に利にあるもの取って替わられることはよくあることだと思うんですけど、排他的になっている関係性について折り合いを付けるような技術が必要ではないかということ、奥井復太郎っていう人は。

1975年って、ここに文献のデータがあるんですけど、実際にこのことを言っているのは戦前なんですね。これ後で、文献をそれこそ集めた形で、奥井復太郎先生っていう。実はこの人、慶應大学の学長をした人で、その弟子が集めた形で出版されているんです。だからこの文章自体は実は大変古いものでして、そういうことを言っていたわけです。そしてその下に書いた引用で『ゆえに、都市計画の問題は、帰着するところ、社会論となる。したがって、現在の計画において、また将来への計画において、都市計画にありては、土木、建築上の工学的技術が、多分に要求せらるると同時に、社会現象についての、ここでは市民社会についての、社会科学上の、社会技術が要求されねばならぬ。社会科学に関する著者としては、我田引水の嫌いは多分にあるが、都市計画の根本大綱こそ、社会技術的に規定されるべきものだと思う』というようなことをここで言っているわけです。

とはいえ、奥井さんの議論は大変興味深いんですけども、問題があって、社会現象についての社会技術的っていう場合の、社会技術っていうのは何かっていうことは、実はこのときは具体的に定義してはなくて、どうしたらいいのかっていうことは後の人に渡したところなんです。だからそれをどうやって検討すればいいのかっていうことを本来はしなければならぬと思うんですけども。これまであまり検討がされてこなかったんですね。

青木 それで、ちょっとここに図を描けなかったんですけども『排他的に折り合いをつける技術より都市の関係性それ自体へ』ってあるんですが、言ってみれば都市があるとして、都市っていろんな人が入ってくるわけですけども、都市を見る見方っていうのは多分、つくり手がいて、この中の生活者がいて、こういうような関係性が一つあり得るわけです、都市っていうものに関して。

社会学がこれまで見てきたっていうのは、生活者のところに焦点を当て過ぎていたような気がします。例えばここに述べたコミュニティ論というのは、すごく大ざっぱな言い方で、具体的にいうと非常に研究蓄積が分厚いので、一言ではまとめられないんですが、あえて単純化して言えば、都市の中にこういうコミュニティがあって、どのような営みが行われているかっていうことで、例えば町内会のメカニズムはどうなっているのかとかかいう研究であるとか、それこそ外国人コミュニティはどうなっているのかとか、エスニシティですね。

あるいは団地の研究、どういうふうに変化してきたのかとか、こういったことが今まで言われて。あとパーソナルネットワークっていうのは、このつながりが、どこどうつながっているのかっていうような研究でして、AさんはBさんと友達関係だけどCさんとも友達関係にあって、この助け合いが行われるから、この地域は維持されるみたいな、そういうような研究が行われてきたんです。ただこれって都市計画の研究で挙げられていたような、このつながりの様相を明らかにする人、これが生み出されていく関係だとか、両者をまとめあげていくメカニズムに対しての説明が全くされていないので、果たしてそれは都市の研究といえるのだろうかといえ、疑問の余地が残るところであるわけです。

その中でもさまざまな都市をつくり出すメカニズムがあると思うんですけども、とりわけ都市計画っていうのは、言ってみればもう一つの意味で重要だと思うんですが、特に社会学にとって、これは自分の社会学の意義付けのところでした、非常に社会学というのは自分の意義付けが重要な分野でして、なぜかという、社会ってどんな所にもあるんです、多分。1人の人間だけだったらそういう社会にならないかもしれないんですけども、人間が2人集まって、この間に何か、例えばAはBのことが嫌いだと、だけどBはAのことが好きだというふうに思ったとして、その間の齟齬を観察するCが出てきて、これである種の社会といえるわけです。観察者と対立者っていうものの関係性ができる。

こういうもののまとまりを考えていくと、それは例えば家族もそうだし、階層研究なんというのものもあるし、あるいは組織の研究だとか企業もそうだし、もちろん都市も。それぞれに家族社会学、階層社会学、都市社会学のように、連字符って呼んでいますけど、こういうのが付いて回るわけです、だから位置付けが非常に重要なわけですけれども。

都市計画っていうのはどういうふうに言えるかなっていったら、調整のメカニズム、都市の中のさまざまなアクターがそれぞれの主張をするんですけども、それをどう統合していくのかっていうメカニズムをいうわけです。そういうのは社会学の根本的な問題につな

がるどころでありまして、そういったところをまず研究していくのは非常に意義があると。これは社会学の見方です。

そこでつくり手を見るということが重要であるんですけども、つくり手を見ることが、ひいては先ほど言った、田村明さんを現代に位置付けるときの偉業の普遍化に資すると思うわけです。同じ方向性で語ることによって、社会学の、同時にまちづくりに関しても理論を一般化するっていう、だから両方にとって意義のある形に持って来られるのではないかと、そういう意味で非常に重要な人物だと思っています。

先ほど言ったように、主体に対してどうアプローチするかっていうことなんですけれども、不思議なことに主体に関する研究は社会学でこれまで多数、実はされてきた研究なんです。じゃあなんで都市計画に目が向かなかったのかなって思うんですけども、主体の意味付けっていうのは、実は社会学の得意とする分野でありまして、こっちの本文には書いたんですけども、虹の話を書きました。

日本で虹っていった場合に、7色の虹なんていうふうに言ったりしますね。でも物理学者が出てきたら、太陽光のスペクトルの連続性を根拠に無限を数えることはできないから、虹は特定の7色に断定できないと思うんです。古代の中国の人は、虹を空に懸かった美しいものじゃなくて、気味の悪い蛇だと思ったそうなんです。つまり無自覚な前提を置いて、私たちは7色と思っているものが、ある見解によっては無限の色だったり、蛇だったりするわけです。こういうように意味付けの複数性っていうところから、一つの方向に物事が収斂して、あたかもそれが真理であるかのように語られてしまう、フィクションをつくり上げてくると。こういうようなことが往々にして起こるわけなんです、この主体の意味付けが複数へ一つの関心に乗っかっていってしまうということが。

これが後ろの図にも書いてあるんですけども、図1と図2が逆にすればよかったんですけど、図2です。漫画みたいなものが描いてあります。ブルーノ・ラトゥールというフランスの哲学者であり人類学者である人がこの理論を持って、社会学者でもあるので、社会学に取りこまれた理論でして、これはさっきの虹の話と似ています。ワトソンとクリックというDNAの2重らせん構造を決定した人がいます。決定したと言われている人というのがこの場合正しいと思うんです。

DNA分子は2重らせんの形をしているぞっていうふうなことはどういうふうに、もちろん構造として、僕はDNAの2重らせん構造について詳しくは分からないのでラトゥールの言ったとおりに語るんですけど、重要なのはDNAのらせん構造が正しいか正しくないかではなく、2重らせん構造であるっていうような言葉が真実として受け入れられる状況がどう形成されてきたかっていう、そのプロセスが重要なわけです。

こまを見て、1で言うところでは『DNAは2重らせんの形をしている』という、3こま目で言っているわけです。4こま目、逆L字型になっているところでは『もっとまともなことをやりなさい』、2重らせんの形をしているとしたら、これはこれはこうなんだとか『いや、らせんなどではない、3重らせんかもしれない』っていうわけです。それは同時代的

にはさまざまな理論があったはずなんです。その中である一つの結論が受け入れられていくプロセスというのが重要であると。

ある人が『ワトソンとクリックが DNA は 2 重らせんであることを示したと言われている』ってということが話に上ってくると。そうするとこのコマで言うと、上から 4 番目の左側で、『これはシャルガフの法則を説明する』と『それはうまくいくだろう』というふうになって、次、1 番下の右側『DNA の分子が 2 重らせんの形をしているので、遺伝子の複製は理解可能になる』というような形になる。

そしてそれが書物の形でワトソンとクリックが DNA 分子の 2 重らせんの形をしていることを示したと、単線的に語れるわけです。でもそのときにもっとまともなことをやりなさいって言った人だとか、3 重らせんかもしれないって言った仮説は、なかったことになってしまう。あるいは始めから 2 重らせんが真理として発見されて、それがそのまま受け入れられたようになってしまうんだけど、これは実はそうではなくて、その間の複数性っていうものを前提にして 2 重らせんが出てきたことを言わないと、2 重らせんの理論としての普遍性は担保されないわけなんですわね。

それをまちづくりっていう場面でも、同じようなことが言えるのではないかなと思うわけです。田村明という人は非常にたくさんのことをした、功績が多いと言われているんですけども、その功績が書物になります、まちづくり論っていう形になる。まちづくり論を読む人はその中でどういったことが行われていたのかっていうことを抜きにして、文書を読む可能性があるわけですね。

そうなったときのまちづくりが、私の所でも利用可能だっていうふうに単純になってしまって、例えば横浜市の事例としてこういう事例が出てきたのに、横浜市の事例であるはずのものが同じような状況で、それが他の地域に当てはめられたときに、いや、横浜市と同じように成功しなかったじゃないかっていうクレームになるわけです。クレームがあたかも同じようになってそれが積み重なっていくと、田村のまちづくり論っていうのはインチキ理論っていうふうな形で処理されてしまう蓋然性がないとは言えないわけですね。だからそういったところを 1 回、いわば反省的に考え直す必要があるというのが基本的に、私が主張したいところであるわけです。

だからレジュメに書いてあったとおり、同時代的には真正の事実の正しさが不確定であるわけです。その中でどれがうまくいったのか、うまくいかないのか、さまざまな試行錯誤がある中で、こういった理論が最終的にうまくいったんですっていうことが確定されている、それが書物なのに、読書をするときにあたかもそれが確定された事実、他には何もなかったんだって言われてしまうのは非常に危険だということなんですわね。

だから、マートンっていう人がいますが、社会学の中でもかなりの大御所で、系統的な証拠によって多少とも確認されるような知識がどんな社会的脈絡から生じたか。とにかくそれらの専門家の知的所産、哲学であり、経済思想であり、政治思想であり科学であり、そういうような専門家がどのような知的所産の中からこういった理論だったり概念っ

ていうものを生み出してきたのかを反省的に議論する必要があるということが必要だと思われるところであります。

これが現状の枠組みでして、そういったことをすることによって、恐らく理論としてより磨きが掛けられるようになるのではないかなと思うんです、枠組みとしてそんなようなことを考えているんですが。この先、『展望』というふうに書いてありまして、景観っていうものを例に、ちょっと考えてみようかなと思って。まだ実はこれ、書き掛けと言えば書き掛けのところでした。

なぜ書き掛けかというと、当事者の声っていうのをまだ私はあんまり拾えていなくて、あくまでも田村明っていう人と、それに関連したような人たちの中において、どんな位置付けがされていたのか、あるいは相互性っていう言葉がどんなふうに位置付けられていたのかっていうことを基にして、先ほど言ったことを事例として示したかっただけですけども、若干時間の制約等もありまして、自分の知識不足がありまして、なかなかどこまでうまくいっているのかというような、少し不安があります。

景観っていうものが展望のところに書いたんですけども、まちづくりにおいて景観っていうのは大事ですね。2005年の著作『まちづくりと景観』っていうタイトルにあるように、景観っていうのは重要な要素としてここに述べられているわけです。分かりやすい対象なわけです、街並みがきれいに整ったら、ああ、まちづくりがうまくいったぞというふうな形で、割と目に見えやすい。であるから当時に、田村明さんというのは、景観に関心を持てば街への意識を高め、まちづくりへの関わりを促すものになり得るという意味で、高く評価しているわけです。

しかし、景観というのは実は揺らぎやすい概念でもあるというわけなんです、ナイーブに景観というものを受け入れてしまうと、先ほど言ったような問題にぶち当たる可能性があるというわけです。そこで景観というものは何なのかということのを少し掘って、詳しくはこっちにもう少し書いてありますが、景観というのは一般には美的な要素を含んだ景色とか眺めのことをいうわけです。2004年に景観法なんかが出ているわけなんですけれども、例えば制定された景観法の問題として、景観自体が何であるかということに関する規定はされていないんですね。

これが意味するところを少し考えながら、まちづくりということ掘ったほうがいいのではないかなと思ったんですが。景観っていうものが日本にやってきたのは、最初は地理学の分野とされていて、ドイツ地理学のランドシャフトという言葉に訳語として与えられたものです。ランドシャフトっていうのはそもそもどういったものだったのかということなんですけれども、ドイツにおいても実は、ランドシャフトっていうのはさまざまな意味を持っているんです。

原義は、一定の広がりを持つ地域という意味で、そこからそのつながりをもって、ある地域の景色を表現する言葉になっていったんですが、特定の広がりを持っているということは、どこの地域でもその景観はあるわけです。海が見える所、山が見える所、都市の景



観だったり、さまざまな景観があるというようなことで、実をいうとドイツ景観学においても、非常に定義はしにくい概念だったわけです。

それを地理学では導入したわけなんですけど、それをもって分析の概念に使おうとすると、分析に使えなくなってくるわけなんです、景観というものが。なぜなら特定の定義がないので、研究者によっていくらでも定義ができてしまうから、それを分析としてしまうと、いや、私の定義ではこの景観は美しいけど、これは駄目だって。でも別の人はこの景観が美しいのに、おまえのは駄目だ。都市なんかはけしからんという人もいれば、いやいや、都市の景観こそ美しいというようなことを言って、分析の枠組みとしては使えないものになってしまうわけです。ところが、あいまいさは武器にもなるわけです、先ほど言ったような形で。

アメニティーという言葉が都市計画でも言っていて、それに似たようなものだと思っていて、ちょっとアメニティーと概念の揺らぎやすさっていうようなことが書いてあるんですけども、美しい景観の喪失っていうこと、あるいはアメニティーの喪失なんて都市計画で言ったりするそうです。建築美あふれる近代的都市景観の創造をアメニティー喪失って言っているんですけど、この定義自体も若干、問題を含んでいます。

建築美とは何か、近代的とは何か、都市とは何か、景観とは何かっていうのは全然、定義はされていないですけど、とにかくそういうようなことを言っていて、アメニティーっていうのはイギリス都市計画の中で重要な概念としてされているんですけども、アメニティーってよく聞きますが、まず一つ目に環境衛生ということ、それから快適さということと、ちょっと字が汚くて申し訳ないんですけども。あと保存。大きく分けてこの三つをおおむね意味するのではないかという、おおむねというところがポイントでして。だからこの環境衛生が何か、快適さとは何か、こういうのは主観のものなんです、そういうようなことを言っているわけです。

西村幸夫さんという都市計画の有名な方がいますけれども、これは何なのかというふうには研究しています。宮本憲一さんという環境経済学だとかいっている人に言わせると、アメニティーとは何かというと、市場価値で評価できないもの一般を混濁にしていると。これは宮本憲一さんの定義なんですけれども、ややこれはまとまった形の定義です、これらは市場価値に評価できないもので、都市計画でいうと、これをどういうふうに解釈したのかっていうのを、これはまず行政が重要なんですけれども、行政の裁量の幅を確保するという形に変わっていきます。

つまり市場価値で測れないものを都市の形成に使うときに、アメニティーという言葉を持ち出すことで裁量に幅を持たせて、物事を進めていくというような形で使われる言葉であるというふうな意味で、アメニティーという言葉が意味を獲得していったわけです。そもそも都市とは関係ない地理学から入ったものが、次第に分析の枠組みになって、分析の枠組みとして使えないと、他の意味に変わっていくというようなことはあるわけです。これはアメニティーですけど、先ほど言った景観も同じような意味で、結局景観というも

の揺らぎやすさ、あいまいさは武器になるんだというようなことなわけです。

それを若干後ろに、レジュメの4ページから5ページにかけて引用したものがいくつかあります。景観というものはあまりここでやっていないですけど、景観と総合性というふうに書いてあるんですけども、景観というものは総合性というものの中で非常に重要な位置を持っているというのは、後の浅田孝の都市計画に関する見立てのところに出てくるわけです。

まず最初に総合性ということをも丹下健三はどういうふうに言っていたのかなっていうことをここで述べているわけですが。ちょっと読んでいただくと『日本の都市計画に関する法には、何ら将来に対する理想が感じられない』と言っているわけです、時代錯誤だと。『官庁機構のセクショナリズムを反映して、総合性を失い、体系を見失ってしまっている。そのなかで都市計画は実体を失って、観念的な慰みになろうとしている』。だから『観念の遊戯から抜け出して、まず建築関係諸法を徹底的に管理して、一つのシステムに統一したい』というふうにも丹下さんは言って、それをもって総合性というわけです。

その総合性というのは、言ってみれば法律です。法律の体系を整えることで体系付けて、総合的に都市計画をするっていうふうにも丹下健三は言ったわけです。これと同時代の高山英華の総合性、『現在いろいろの計画をする場合に、総合ということは学問的にも行政的にも大変重要であると同時にきわめてむずかしい問題でもある。地域計画という問題も、地方の地域について中央の各官庁が縦割り行政で所管争いをやっている。鉄道は運輸省、道路は建設省、工場は通産相などなどの各計画が現地では必ずしも一致して効果をあげていない。工場はできたが道路が間に合わない、住宅はできたが学校や病院がそれに伴わない、といった点が少なくない。そこでいま考えられている新産業都市の建設というときには、各省のばらばらな行政を現地できちんとまとめあげることが一つの大きな課題になっている』というふうにも言っています。

トップダウン的傾向とボトムアップですが、言ってみればここに出てきたのはトップダウン的にまだ、法律の形を変えるっていうことですから、ある意味トップダウンなことで総合性を担保しようとした部分なわけです。ちょっと後ろのページに行ってくださいと、浅田さんはどういうふうに見立てていたのか、これは1969年のものから取ってしまして環境開発論というんです、環境計画ではなくて環境開発論です。

『都市景観や都市構成と市民の生活意識との関係の分析から、人間生活の物理的な外部条件が、人間の生活の内容や意識活動の内部条件と密接なかかわりをもつという前提の下に、これらの外部の物理的状況を環境と呼ぶのである。生活の外部条件を構成しているところの物的施設やそのあり方、外部空間の形態や質、その量などが一体となって、都市環境を形成し、生活や生産の場の条件を左右する』。

浅田さんというのは大変理論的というか、どちらかというと理論的なものを考えているというふうにも印象を受けるんですけども、注目すべきはここに載っているような、人間生活の物理的な外部条件と、人間生活や意識活動といった内部条件が相互に関連を持つ

という前提を置いている点なんですね。これは言ってみれば、市民の生活意識を外部条件との関連性の中に結び付けようとしているわけです、単なるトップダウンではないわけなんですね。むしろトップダウンだけじゃなくて、下からの意見も、見解を戦わせた上で都市計画を進めなければいけないというようなことを言っているわけです。

そこで下の2行ですが『個性のない混在性に都市独特の個性を与えることを可能にするような諸制度、諸方式の検討が行われなければならない』。ここで景観出てきますが、『都市の精神、都市の景観、都市の文化そのものに関連した自然的、物的、あるいは文化的諸要因に対して再構成・再編成を約束するような方法の開発、とりも直さず、画一的な水準に止まっている官製都市計画万能のやり方に対して、真の都市計画、都市設計を確立する方式の開拓である』、これが必要であると言っているわけですね。

ここで景観というものが出てくるんですが、結局、都市の個性というものを与える手段として登場してくるんですけども、どちらかというと浅田さんはボトムアップの視点を非常に重視していると思うんです。それは今までの丹下さんとかいったところではなくて、トップダウン・ボトムアップのところからアプローチをしようとしているところです。じゃあ田村明という人はどういう人だったのかなという、中間領域というものの実践者ではないかなというふうに考えられると思います。

それがなぜそういうふうな形だったかという、都市における矛盾というものを自治体全てが引き受けるのではなく、調整的に果たすべきだというふうな主張を後にしているんですけども、その要素として景観を持ってくるわけですね。トップダウンだと、法律の解釈を変えるだとかいうことを言っている。一方で市民の声を吸収、それこそが大事だという、結構、浅田さんのラジカルな見解が出てくるわけで。

緑の軸線というもののところに関して田村さんが言っていることですが『緑ゆたかな軸線を設けることは都市づくり百年の大計として意味がある。現時点の中央の力関係だけで計画が決められてはたまらない。まして都市景観のような価値には全く本省はない。地元自治体が主張するほかない。そこで企画調整局は、全体を調整するだけでなく、市の内部で主張する部局をもたない緑の軸線、大通公園、都市景観などの、将来の都市環境の質について主張しなければならなかった。他方において、企画調整局は、六大事業として的高速道路や地下鉄を推進する立場にあるが、それに加えて新しい価値の主張をし、なお全体を取りまとめ、計画案の具体的調整を行わなければならないのである』と言っているんです。

都市景観というものが、浅田さんのようにトップダウンではなくボトムアップのところ非常に重要な要素を持っているというところだと思うんですけども、一方でそれを吸収するのが、中央の力関係ではなくて自治体という中間領域の所でそれを引き受けようとしているわけですね。だから中間領域である自治体での田村さんというものの生み出されてきた、都市景観というものに対する示唆というものを本質的に捉えない限りは、例えばそれをまちづくりに持って行って、いや、ボトムアップで景観は大事なんですって

言ったときに、その根拠として田村明のまちづくりですって言ったところで、こうしたその背景を背負わないと、考慮に入れないと、ちょっと違ったものができてしまう。ひいてはさっきの、田村明の言っていることはいんちきだみたいなことにつながってしまう可能性があるということなんですね。

だからここではある意味で自治体をどのように考えていくか、運営していくか、自治体運営の方法としての景観というものを考えなければならないはずのところを、まちづくり、景観というふうに単純に結び付けてしまっただけではいけないのかなというふうに思うわけです。逆に言うと、景観というものをまちづくりにおける普遍的なものとして位置付けるときに、作業の方法としてまず都市景観をまちづくりとしてやっていく場合に、自治体の中の改革のあり方、さっきのは消してしまいましたけれども、西村幸夫さんが言っていたようなアメニティーと同じように、裁量の幅を持たせるために非常に重要な概念なんだ、それをもって今の自治体のあり方を改革していく、そのための戦略的な地平になり得るものなんだというふうに主張するのが、まず一つのあり方としてしなければならないであろうことです。

それがさっき言ったようなブラックボックスを開くと言う方法論において可能であると思うところで、そこからさらにもう一つの方向があって、ちょっとまとめますと、景観という地平があって、自治体の、この方向性がまず一つあり得るわけです。この検討をした上で景観という概念の両方向の矢印があって、こういう検討をすると、ここに景観の意味がある程度普遍性を持った形として同定できるわけです。

それで景観というものが理論としての正しさを、一般の理論として形を持っていて、その上であらためて景観として意味されていたもの、次に各地のまちづくりにおいて、これから今まで景観で名指されていたものは、田村の言う景観との対照の中でどのような位置付けにあっているか、ある種のイデオロギーみたいな形で固定化された見方になっているのではないかということを経験化する戦略的な理論として、田村明理論、まちづくり理論を位置付けられるのではないかなというふうに考えるわけです。

だからブラックボックスを開くというのは、そういう意味で重要なわけです。ついて、一番最初に検討作業で私がやらなければならないと思っているのは、この理論はこれだけでは当然駄目で、普遍化するときに自治体のエンパワーメントというのが、じゃあ田村明さんが自治体、横浜市において景観というもの、あるいは景観で直せるものに関して、自治体職員、横浜市の職員であった人がどういうふうに読んだのかということを検討しなければならないと同時に、景観というものが必要である背景、都市計画を進めるにあたって田村さんが見た景観という概念を持ち出さなければ対応できなかった当時の自治体のかたがたの必要性、この概念が必要であったという背景を両方見ることによって初めて普遍化ができるというわけですね。

それがこのレジュメの5ページの後ろに書きました『田村を自治体職員がどのように読み、また田村によって自治体職員はどのように読まれたのか』という視点が不可欠なわけ

でして、それは当然、この検討課題はできていませんし、今後の検討の課題としたいと思っております。もちろん私自身は田村明さんが生きていられるときに、残念ながらお会いすることができなかったんですが、当時を知っていらっしゃる方がここにいらっしゃることもありまして、よろしければご協力をいただいております。それをもって、まちづくりの局所的な文脈に閉じ込められない普遍性を持ったものへと昇華させていけたらというのが、研究の最終的な目標として今、思っております。以上で報告は終わらせていただきます、どうもありがとうございました。

田口 結構重たい話が。私、田口がもやもやとしていたことを割とうまく整理してくれているなというふうに僕は思っちゃっていて、だけどこれ実際の研究の積み上げとして進めていくのは結構大変だろうなと、大変だからやるんですね。大変じゃなかったらやらないですということをごさいます、いざ皆さんのほうからご質問どうぞ。

青木 自分で書き癖と言いまして、浅田さんじゃないですけど、どうしても理論寄りに寄ってしまっているの、ここに出てきた用語でよく分からないというのは、もしかしたらあったのではないかなというふうに思っております、そういったところからでもご質問等、あるいはコメント等ありましたらよろしくお願いたします。

奥津 奥津です。すばらしい発表ありがとうございました。私も大学、社会学の所にいたんですけど、あまり社会学の勉強とかをちゃんとしなかったの、ちゃんと勉強するとこういう形に、すごいなと思いました。質問なんですけれども、都市計画を社会学としてどう分析するかみたいなお話があったと思うんですけども。

やっぱり私自身も感じたんですけども、どうしても社会学の分野と都市計画の主体というか、行政というのがネガティブに捉えられていて、特に市民運動論とか、ジェントリフィケーションみたいな文面だとかなり、市民に対して行政があつて、やっぱり行政のほうが悪者にされがちな面があるじゃないですか。でも青木さんの発表を聞いていると、必ずしもネガティブに捉えるんじゃないで、調整のメカニズムとして客観的に分析しているという視点があったと思うんですけど、その辺りはどう？ もちろんポジティブに捉えているだけではないと思うんです、ある程度やっぱり、ある意味色を付けずに見ている点がすばらしいなと思ったんですけど、その見方というのはどう意識されていますか。

青木 非常に重要な指摘だと思っております、実を言うと社会学の中に、いよいよこういうような議論が出てきているところがありまして、主に地域社会学と言われるような分野でありまして、自治体っていうのはどちらかと言うと運動等に対抗する、そういったところに位置付けられることが多いんですけども、いや、何もやっていないんじゃないかみたいなことを言われるわけですね。

田村明という人は何もやってないんじゃないかみたいな、そういう批判が来そうな勢いがやっぱりまちづくりに関してあって、それは住民を巻き込んだまちづくりとか言っているながら、住民が一体何をしているのかが、今一つこういった理論から見えてこないみたいなことを言っているんですけども、僕は反対の立場というか、むしろそういったものも含めて先行研究の批判というか。実際現状、行政っていうのに敵対的な見方っていうのは割と根強くて、コンフリクト、ある形として行政対市民というような形で対立があって、社会学はこっちの立場に立つことが多いわけなんです、実際これまで見てきても。

ただこれは何を結局したいのかなというのは、現代から見れば分からないわけで、結局地域を担うものはこっちであって、暗黙の前提が行われてしまっているんじゃないか。必ずしもそうではなくて、こっちの組織を見た上で普遍化しなければ理論は普遍化は得られないように、こっちを普遍化してしまえばいいっていうふうに思っている傾向はあるのではないかって私は思っています。だからこそこっちを見るんだということを、私は先行研究の批判として打ち出したいと思っているんですが、今後どうなるかは様子を見ながらというような形でして、なので。

田口 そこで注意しないと、行政寄りだなと決め付けられちゃうんじゃないですか。

青木 実際そういう傾向はあるかもしれませんが。もちろん両方にもくみしないっていうんですけど、ただどっちかっていうと、見るべき対象がこっちに偏り過ぎていたっていうのはあることでして、基本的にはこっちに寄って見なければ、本来のあり方ではないという主張の論旨ではあるんですが、こうした見方は若干相対化しなければならない、というのが、基本的な立場であります。

田村 僕は、この前の前ぐらいのときに田村・吉井論というのをちょっとやったんですけども、明の上なので。岩波で仕事をしていた人で、どちらかと言うとジャーナリスティックで、世界とか文学とかの編集長もやったりしていたから、そちらのほうのサイドの意見が強いですから、この2人が毎月1回会うんです、家族でね。

そのときに2人でディスカッションをしていたのを何年かにわたってずっと見ていて、たまたま市民運動派の人と、行政派らしき部門にいざるを得ない田村明との会話っていうのが何年も続いたのね。僕にとっては大変な財産というか、心の、人間のあり方をそういう形で見させられたという意味でもすごくいい時間だったんですけども、今お話をしている、どっちサイド付くかというんじゃないくて、やっぱり研究者っていうのは両方のサイドに付いて見なきゃいけないわけでしょ？だからどういうふうにオープンにそれを見るのかという視点を自分で確立しないで、公平に見られないというお立場になっているんじゃないかというのが、私の感じね。

それから最近、あなたさっきDNAの話したの、どうも本当はDNAの多少、研究を少しし

ている。ちょっと変なこと言ったような、間違っていないかなと。2重らせんって勝手に決めたわけじゃなくて、自然をいろいろな物理化学的な手段でもって観察した上で、こういうエックス線の写真を見たら、これは2重らせんと考えたら非常に具合がいいなという現象だったと。それと生物学的な遺伝現象とのメカニズムが非常にマッチングが良かったんで、その広告を出したのがノーベル賞になったんだよね。

だから事実は、現象を物理化学的に評価した結果に基づいて言っているんで、単に想像してこうなったらいいんじゃないかって言ってるんじゃないことを、化学者としてやっぱり一応コメントしておこう。

青木 ありがとうございます、受け止めてもちろん勉強しようと思います、ラトゥールと一緒に。もう一つ、確かにオープンな立場に立たなければならないっていう指摘もおっしゃるとおりでして、それどう位置付けるかって非常に重要なんですけども、やりたいことは別に、こっちに味方したいとか、あっちに味方をしたいわけではなくて、あくまでもなぜ田村明は今読まれるのかという問いに対して答えるという視点からいくので、別に行政の見方を知らしめるじゃなくて、普遍化するための指摘が必要だっていうことを、立場として示そうかなというふうに思っています。

井上 よろしいですか、井上と申しますけれども。都市計画の専門家というか実務家なんですけれども。一つは感想なんですけれども、多分、田村明さんは行政とか都市計画というのは、社会としては当然、必要なものだっていうのは大前提はあったってことですね。ただし今も含めてだけれども、自分が属しているのではあるけれども、現状については非常におかしいということをおっしゃるし、実際一緒に仕事をしたら、田口さんとか皆さんほとんどラジカルなことを引っ張られて、大変な形でやっておられたと聞いていますけれども。

やっぱり田村明さんご本人の中に、今の行政はおかしいからいらんとは決して思っておられない。行政がなきゃ地方自治体っていうのは、市民の政府っていう本を書かれたように、こうあってほしいっていうことは本で書かれているんだけど、現状は全然そうではないっていうことは事実言っておられたし、だからそこは非常に複雑な二重人格ではないんだけど、これは絶対に必要な社会インフラだっていうことは確信、これがなきゃ駄目なんだ。けどそれは今の状態ではなくて、こういうことじゃないのか。社会実験、政策実験っていうのはただの用語なのね。

逆に言えば、そういうことをやって引っ張った人がいなくなっちゃったら、今の横浜は全く元の官僚式に戻っているという。これは日本の、残念ながら縦割りの、前例主義の行政が、今、人口減少社会で、そんなことを言っていたら何もできなくなるっていうので、かなり風潮が変わったところで動き出したところはあるんですけども、田村明さんというふうに限ればそうなのかなっていうのは、私の感想の一つなんですよ。

もう一つは、僕は学者じゃないので言論的なことはあまり言えないんですけども、例えばここで、浅田さんが言っていることを、私なんかは非常にざくっと言ってしまうと、都市で生活している、これは人だけじゃなくって、現象とかマッチした、これが中身だとしたら都市計画は入れものについてどうするかっていう、つまり中身と入れものがあるって、入れものが中身を考えなかった。中身は入れものについては全く発言してこなかった。それをやっぱり両者は本当に密接な関係があって、相互に影響を受けながら、優先になったり、国の違いになったり、歴史の違いになったり、そういうふうにやっぱり田村さんは、今風に言うとプログラムとか、宇宙的な感覚でそういうことをやってられたですから、細胞から天体にいたるまで。

青木 スケールで。

井上 私も黒川紀章さんの所にいたので、メタボリズムについては分かったような分からないような、なんでこれがメタボリズムの理論での設計だっているのはなかなか説明がしにくいことをやってきたんですけども、浅田さんの話はすごくよく分かる、川添登さんとか。多分、今の都市計画とかまちづくりの世界は、何とか努力して、中の生活の構造を一生懸命何とか知りたいたいとしているんですね。そうじゃないともう、都市とか地域とか成り立たないと思う。

ぜひ社会学のほうにお願いしたいのは、空間に近寄ってきていただきたいんです、経済学とか社会学は、空間というのがすごく、抜けているんですね。だからなかなかわれわれと話が通じない。もっと言えば地べたの話とか土地利用とか。土地利用が経済学、社会学でものすごい重要な役割、だけどそれが空間感覚がなかなか、申し訳ないけど議論していてお持ちでない大先生がいっぱいいるもんだから、話が通じないんですよ。

さっき景観という話が出たので、景観が辛うじて、おっしゃる目に見える空間、土地利用っていうのは相当な想像力を持たないと空間にならないので、景観は簡単というか、先ほどのアメニティーとか景観がっていうのは、日本の場合まさに裁量で、どちらかと言われれば欠如していることからスタートするんですね。なんか分からないけどアメニティーがないねっていう話だと、意外と同意が得やすい。

景観っていうのはやっぱりマイナスチェックから始まる。こんな広告、こんな看板がいっぱいあるのはおかしいんじゃないかって言ったら、みんなそうだなって、それをなくしていい街にして。今は時間の流れから言うと、景観というのはそのときの固有性というものをどうつかまえるかとなったと、はたと技術論的には困っているんですね。やっぱりそういうことを積み上げてきたら、マイナスチェックで。都市計画もマイナスチェック、完全主義というか、何か起こっているわけじゃない。

だけど固有性とか個性とかいうものに対しての、社会学でどういうふうにそれが動くのかということ、それから空間をどうするというようなところをぜひ、僕は昔から社会学



家の方と議論したいなと思ってますけど、ほとんど通じない、申し訳ないけど。それは多分、空間の。そこのやっぱり景観とか、ぜひ若い方がきょうの話で質問したり議論しながらやりたいぐらい山ほどあるけれどそれは置いといて。

今のぜひ、空間と言うのかな。やっぱり田村さんの都市デザインは、実は都市計画も空間、ないんですよ。システム。だから都市計画やっている人も、空間感覚ない人がいっぱいいるんですよ。田村さんがなぜ都市デザインから行ったかというと、街の姿、交差点の所にそれぞれ広場をちゃんと造ったら、もうちょっと楽しい街になるんじゃないかっていう。街の姿に話を彼はやっていったんで市民と通じるようになったんです、それで市民参加ができた。

商店街のおじさんだって、ここにこういう木を植えてこうやって、ここにベンチを置いて憩いの場をつくれればいいじゃないって言ったら、それは乗ってくるわけです、それを道路交通法を何とかクリアして何とかって都市計画の話は、全く姿形が見えないんですね。だから姿形を何とかみんな、共通の言語にしてやっていこうっていう、これは神奈川県で横浜がスタートして、私は藤沢市の景観を20年ぐらい一緒にやっていたんですけども、やっぱりそういう名前があるんですね。だからぜひ結論ですけど、空間に近寄ってきていただきたいなというのはお願いします。

渡邊 一ついいですか、忘れないうちに。余計なことかもしれないんですけど鮮明に思い出したというのは、景観とはっていう簡単に、非常に単純な世の中を、景観と総合性のところで、丹下健三、それから高山英華のというふうにして、丹下さんをAとして、高山さんをBとして、浅田さんをCとして、田村君をDとする、私ちょうどABの時代に大学院生でいうと2人にお付きをしていたんです、院生として。

仕事をしていたんですけども。そういう意味で景観というのは、このとき大学院生のレベルで学んだのはこの2人ではなくて、農学部で横山光雄先生がいて、造園の先生として分類されているんですけど、造園学かもしれません。分野は正確には覚えていないんですけど、私、学科が違うのに盗聴しに聞きにいったんです、授業を。そこで覚えたことが、日本で恐らく景観ということを勉強するとすれば。

自分とはっていうことで横山先生自ら経験を語り、イギリスの産業革命の前後の景観の変化、つまりどうなったかとうことをやはり、新任当時の変化を鮮やかに思い出していくと、記憶として図られたんですね。だからそれ了見になっているんじゃないかなと推測する、そのままのランドスケープデザインというのは、そこから起きていると思っているんです、原点は。

日本のランドスケープ、片仮名になるんですけど。だから今はまだその後の学生で、今の大家になってらっしゃる造園家のかたがた、出発点が、ランドスケープっていう言葉を使い始めた、もちろんコンサルタントもその頃です。できた当初はやっぱり横山先生の影響だとかそういう勉強をしているのかなと思います。ここにはそれが参考みたいになって

ますからちょっと調べていただくと。アーカイブズとしては少ないと思います。

青木 ありがとうございます、調べてみたいと。

田口 すみません、お名前いただいて。

渡邊 渡邊二郎といいます。時間がないから浅田さんとか田村さんの、CDのほうから知ったところが、ABだけの話だけなので、CDはちょっとお手伝いしましたけど。

田口 時間も少なくなりましたので、もしどなたか。

木村 木村と申します。私はNPOのということにもなっていて、それから東京の現代まちづくり塾という所で、NPOでやっているんですが、私はもともとは建築の設計のほうがベースでして、都市計画とかまちづくりとかはやったことないです。いろんな経緯があって、田村明さんの東京のまちづくり塾に来るようになって10年ぐらいかな。

晩年の田村明さんの形骸に触れることができ、田村明さんはその前から都市計画の世界での何となくの偉い人っていう、一般的に偉くはないかもしれないんだけど、私の中では都市計画の中で偉い人っていう位置付けでお目にかかる機会があって、田村明さんの横浜での実績と、その後のまちづくり塾でいろんなことをおっしゃっていたことを総合的に考えると、やっぱり非常に先見性を持った都市計画のパイオニアであって、何とかその方の業績を普遍化するようなことができないかという問題意識でまちづくり塾に参加したりして、そういう意識の中で、きょうのお話は非常に面白かったです。

青木 ありがとうございます。

木村 残念ながらあなたの言われていることを、あるいは田村がしたこと、100パーセント理解してはいないと思うんですけども、いくつかなるほどとか、そうだよなって思わせられるところがありまして。一つは都市計画が読者を持っていたのですか？

青木 はい。

関根 読者を生み出した、田村さんが残された文章って僕、非常によく読むんですけども、きちんと読んでいられるかどうかは分からないけど必要があって読んだりすることがあるので、まず平易なんです。非常に難しい内容が平易に書いてあるということが、田村さんの文体の非常な特徴だということを思っていて、読者を生み出したという、すごく納得するとか、そうだと思うところなんです。

これは都市計画に限らず建築の世界の専門家も非常に、やっぱり自分の考えている今時点でのことを正確に表現しようとする、どうしても難解な文章になりがちなんだと思うんですけども、一般の人が読んでも何のことっていうか、さっぱり分からないという文章がいっぱい残されているんですけども、田村さんの文体研究を少し精密にやってみると、面白いことが分かると思うんだけど、どこからああいう平易な文章になったかということですよ。

ちょっと正確には僕は今、答えきれませんが、やっぱり田村さんがまちづくりという言葉に突き当たったというか、都市計画じゃ駄目でまちづくりという言葉なんだということ考えたということと田村さんの文章が平易であるということは、どこかでつながっているはずだと思うんです。それは読者を生み出したと言われたので非常に明快によく分かったわけですけど、やっぱり普通の人に読んでもらうために、自分の文体をどうしなければいけないかということは、すごく考え、あるいは努力して書かれた文章が、田村さんの文章なんだというふうに思っている、都市計画の読者を生み出したというあなたの着眼は実にすばらしいと思います。

青木 ありがとうございます。

関根 それから面白いなと思ったのは、社会学は主体を問題にするのが得意な分野だっておっしゃっていたと思うんですけど、実は東京のまちづくり塾に、170 項目ぐらいは田村さんの残されたまちづくりプログラムというのがあって、田村さんは60 ぐらいまで自分でコードにされて、僕らは聞いている側だったんですけど、亡くなられた後どうするかということになって、ここに座っている井上さんなんかもそうなんですけど、僕ら塾生が代わりにプログラムを引き受けて、代行してやっていこうっていうことになったんです、その話はまた別の機会にするんですけども。

章がいくつにも分かれている中に、第7章、現代都市変動の論点というのがありまして、その中に七つの項目があるんですけど、人間の欲望とその限界とかそういう項目があって、たった七つの項目だったんですけど、代行してやるのに2年半かかったんですけども。つまり田村さんは都市論をやるときに、やっぱり人間論というのをやらないと気が済まない人だったわけです、あるいは人間とは何かというところから説き起こして、都市というのはどうあるべきかってなると、やっぱり言わざるを得ない人で、それは当然横浜市で実践をされているときも根本にある問題意識としてはずっとあったはずのものだと思うんですね。

だけど多分、都市計画学をやるときに人間論まで掘り起こしてそこからやっている人って、僕は少ないんじゃないかなと、よく勉強して言っているわけじゃないんですけど思っていて、社会学が主体性を問題にすると、非常に興味深く伺えました。

あと田村さんが、もう一つは自分が横浜でやってこられた、横浜の中での都市計画論を

晩年はより普遍的なものにする努力をされてきたと思うんですけれども、あなた景観ということをおっしゃっていたんですが、私はその中で景観と自治体の問題として中間領域ということを設定されたっておっしゃっていましたが、僕の問題意識で実は地域かなと思っていて、もちろん横浜市役所に勤めておられたわけですから、その自治体の職員として考えたんだけど、田村さんのまちづくりの重要性あるいは独自性というのは、横浜という地域のことを徹底して考え抜いたというところにあって、それが国主導でやってきた都市計画、より一般論的な、あるいは国の視点から見た地域、今あるべき姿ってやったのに対して田村さんのやられたことは、横浜市にとって一番いい地域のあり方はどういうことだったかということを考えるということで、そのときに景観の問題は非常に、地域固有の問題として一般論と別に出てきたらうし、田村さんは晩年のいろんな本の中で、自分のしてきた特殊例と、それが一般論になるときに、どういうふうにしたら一般論になるかということは、すごく苦労して考えていたんじゃないかなという。

現代都市読本という 1994 年に出た本があるんですが、その中で多分、自治体向けの都市計画、あるいは都市政策の教科書として考えられた本じゃないかと思うんですが、その中で非常に表現に気を遣って、あるいは論理構造というものを作りながら本にしているという感じを僕は思っていて、その辺のところは青木さんの問題意識と非常に関わりがあるんじゃないかなと思っているんです。非常に面白かった、刺激されました。

青木 ありがとうございます。

田口 そんなことで、ありがとうございます。以後いろいろと情報提供、あるいは青木さんのほうでこういうかたがたにヒアリングをしたいとか要望があればそれをお教えいただいて、研究の支援をしていきたいということでございますかね。

青木 どうもありがとうございます、よろしく願いいたします。

田口 青木さん、それと奥津さんは本当にありがとうございました。最後にお伝えしておきますが、10月、11月、12月の予定が今、決まっております。ただ日にちはまだ決まっていないんですが、きょうここにきていただいている真矢さんに、10月に横浜まちづくり塾のお話をお願いしてございます、日程調整はこれからですが。それと11月に先ほど発言されました関根さんのほうに、現代まちづくりという東京の活動についてお話が。

そして12月に前回の総会にご参加された姫路に在住の三木さんが、田村さんは関西方面に行かれるとよく三木さん呼び出しているいろいろと語り明かしたというお話が多々ありますが、三木さんのほうに、そういう言い方もちょっとあれですが、地方における田村さんのいろんな活動をまとめてお話をいただく予定でございます。全て日程調整はこれからでございますが、月の予定としてはそういうことでございます、よろしく願いいたします。

どうもきょうはありがとうございました。

(了)